NFRJ18 質的調査の実施状況と今後の計画

○木戸功（聖心女子大学）

NFRJ18 質的調査（第 4 回全国家族調査質的調査）は、本報告がなされる 9 月にはすでにインタビュー調査が開始されているはずである。ここでは、昨年度から本年度の実査にいたる質的調査研究会の活動について整理するとともに、実査終了後の計画と検討を要する課題について報告する。その際に重要な論点としたいトピックとして、量的調査との連携、質的調査の方法論、そしてデータのアーカイブ、これらをとりあげる。

量的調査から質的調査へ：報告者を代表とする質的調査研究会は、一昨年度末のプレ調査の結果を踏まえて、調査の依頼方法と調査内容について検討を行ってきた。調査の依頼については、まず、先行して実施された量的調査において応諾の意向を質問し回答を得た。その詳しい結果については本テーマセッションの第 4 報告で報告されるが、インタビュー調査への協力に前向きであると回答した者は 275 名、内容によっては協力を検討してもよいと回答した者は 954 名おり、回答者全体に占める割合はそれぞれ 9.5%と 32.8%である（いずれも 5 月末日時点で把握できているもの）。インタビュー調査の対象者の規模は概ね 100 名を予定している。これを踏まえて、5 月中に実施する第一次依頼者の選定にあたった。まず前者の 275 名については、全員に依頼することに決めた。これに加えて、各調査班が希望する対象者像に照らして、954 名の中からも依頼者を選定し合わせて約 1,000 の回答者に第一次依頼を実施する。6 月中には第一次依頼への応諾者のリストを作成し、あらためて各調査班において第二次依頼者を選定し、調査の日時を含めた具体的な依頼を行うことになる。

質的調査の方法論：〈結婚・ワークライフバランス〉〈子育て〉〈高齢者〉〈多様性〉という 4 つの班により実施される質的なインタビュー調査では、無作為抽出されたサンプルに対して有意抽出を施すことになる。量的調査との連携のあり方という点についていえば、混合研究法でいうところの「説明的デザイン」（Creswell and Plano Clark 2007=2010）に近い関係にある。インタビュー調査への協力者の中からさらに選定・依頼し実施を予定しているフィールドワーク調査までをも含めて、NFRJ18 をこうした混合研究法による研究デザインのもとに位置づけることもできるのかもしれない。その一方で、本調査はそうした研究デザインにはおさまりきらない可能性を持つものとも考えている。本研究会のメンバーたちは、直接的に対象者たちと対峙し、かれらの家族にまつわる生活史と現在の家族生活のあり方について聞き取りを行う。「対面的・コミュニカティヴな質的社会調査」（稲葉 2019）として本調査を位置づけることができるとするならば、それによって得られる知見は量的調査を含めた今後の NFRJ のあり方を考える上でも示唆に富むものになるかもしれないからである。

質的調査データのアーカイブ：NFRJ の一環として実施される本調査においては、公共利用可能なデータの作成とアーカイブ化もその目標の一つである。本調査においては、昨年度の大会テーマセッションでも試案を示したように（木戸・永井 2018）、対象者の生活史からかれらの経験した家族の事例をとりだしアーカイブすることで、戦後の日本社会における家族変動を記述、分析できるようなデータを残したいと考えている。版を重ねるテキスト『質的調査』（Silverman 2016）はその第 4 版から新たに「質的データの二次分析」（Bishop 2016）に章を割いている。また、Data Management Plan（DMP）という考え方が質的調査においてもおよびつつある中で（堀内 2018）、「リサーチ・インフラ」（Flick 2017）の整備が質的調査における重要な課題として議論されている。こうした社会的要請に応じつつ、実査終了後のデータの整理とアーカイブおよびその管理のあり方について考えていかなくてはならない。なによりも、実査に際してより詳しい調査への協力依頼を行い、二次利用を含めたデータの利用とアーカイブについても応諾を得ることが求められる。

キーワード：全国家族調査、質的調査、アーカイブ